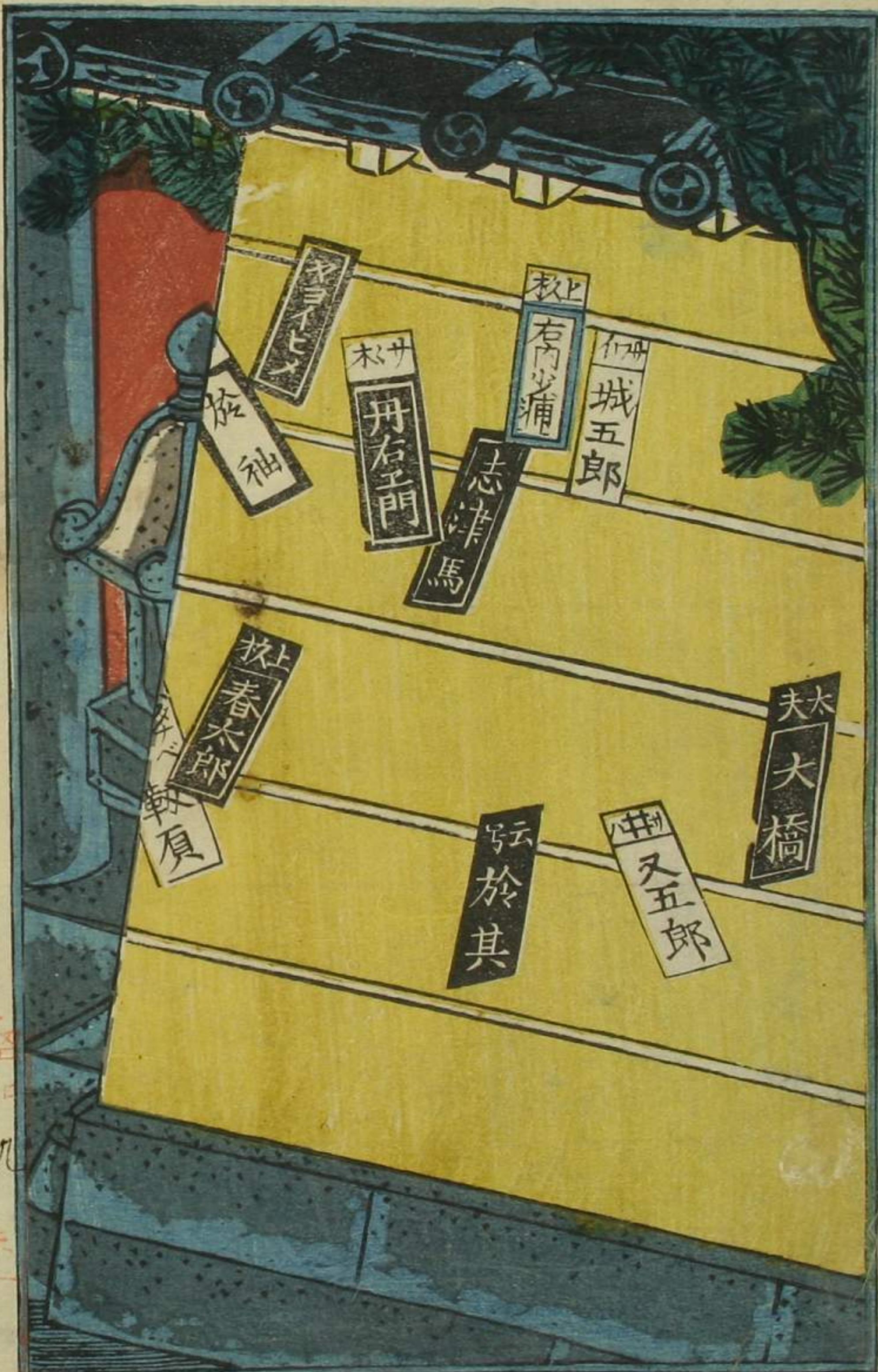


八
4338
1-10



昭和九年九月十一日
購入



上枚右内少輔





澤井城又五郎

山里
あま
峰乃
あさ
級の
き

講讀切釋伊賀越乘樹合羽

片五段

母昭見 けの世花案
 小奴村平 恒性 边志淳 八重
 荒井金吉 游瀬 妻池添源八
 川角上松右内 肉内補 深井城ス郎
 色若守安泰 沢町山 妻又又
 順井城ス郎 終尾 深井又又
 全故中村山市山川助川千足助浦
 中村山市山川助千足助浦
 海老君助
 村山市山川助千足助浦
 中村山市山川助千足助浦
 海老君助
 姉本舟右弓 孫田成太郎
 嫁也その 甥吉九郎
 故故中村山市山川助千足助浦
 中村山市山川助千足助浦
 海老君助
 村山市山川助千足助浦
 海老君助
 姐本舟右弓 孫田成太郎
 嫁也その 甥吉九郎
 故故中村山市山川助千足助浦
 中村山市山川助千足助浦
 海老君助
 村山市山川助千足助浦
 海老君助

絵が伊賀誠多戻合羽一

火移紙中絵西さく下り枝正西三尺をうねまきの
 大は西の方に花見幕むろひをとくよ木に入ると上松
 青き節衣もううふと強とこそて走つて木に登りひづる道
 乃葉びんとみ様と投重とされいがとうふて有ひひづる道
 けせひ大橋堀筑つ林ドそく治すぞり納戸小どもせんを擔
 げひげる

春よりあるあひはははとうまくわれをくへ名きてか
 しやうにハ足利衆の娘と嫁ひめをあげくと作つかはれどもまれる爲屋くるわ

あうくま まを角ハ勵ふてやりむことかしづる三人秋雲てやうねるふーぞりや
この三は相共にてむくにてほさくさすひ大せつれいぞ
ここりけるとまひ うで廻せ とこく そく そく そく そく そく そく そく そく
ばく こく まひ うで廻せ びつひて びつひて
殿歎えじめ一衆中 お迎ひのゆきち筋盃砂拂除歎次のがけへごつち
るす女どもがさとがうひとヤア 無からやけノ船ふ上仗の役人ぬへふつき
殿歎えじめ一衆中 お迎ひのゆきち筋盃砂拂除歎次のがけへごつち
がうちのさひ中ろくせきの拂歎とまつてやくべーた筋の坊けする曲
者一々纏うてあせん ういやうでまよせ まよじうひやいコリヤ大をみ
三へーきかやイ ヤア 刑セテモ無外老め已かに奴もれバ角セモ
へきを見てヤア ああこハ翁歎れ いハアとビサラギツク サア 繩をひ
むりくうして へいかとす
見ぬクヌゴトかれを纏にてこぬり サア ま矣ハ 仰ヒーゆつとでも

い百姓が二ふきあひでんをそひナア そんかうゆとみふぞハテ百姓
とりふ物ハ 春どのれにまひ云物やらうひに皮とゆがむいふよいてマア 犬を
でやり度てまひのドヤ 仔不和わせぬとひふとて拂歎うつてまひ
にりこさをやと云へんはと美づあんけやてはと云ふやあんぞ 春
あふテモつう瓶のせうぬふ食して云このどやまげけひきをて等切
車て多ふくとまちやだんア しきごいナ まねあしまのとへ百姓がとお小
きものでぐんモ せまふしてア け歎や 亂ハ 亂にさ志せんのでぐんは 春
まあまにかわてちよのとゆぞゑてとも づらくとくぶるふくご お
しくさがきうきを支せ寔にだんさしてきて赤考ハ け拂歎とれて

あうえく 来を角ハ拗ホモやりむこほとあうごまうニ人狀ホヤリタれニシテ
アリテ此モ相士にておもてにて傳さくまかひ大せひつれいそ
とこりけるときあひたす うで迎セとくく モトヨモナ ヤイ大きあくべゼー
ばくこときまいて うで迎セとくく モトヨモナ ヤイ大きあくべゼー
るす女どもがあとがらつて ヤア多妻かや川ノ船ふ上仗の役人立入ふつき
殿歎えどめ一家中 お迎ひのゆきち筋盞砂掃除歎次のがけいごつち
ぐうちのさい中ろくせきみの拗歎とゆうてやくスー乃筋の嶠けする歎
者一く連れうてゆせん引 イヤうでよよせ まことくひやくコリヤ木を
こへざるかヤイ ヤア祠をくも裏外老め己かに奴されば 扇を
へうき見て やアあるべくらぬ歎れいとハアリとびすきうびつう サタ連れうて
びりくうて へやくする サタ連れうて
見ぬクヌミとかれを傳にてこぬ サア主美ハ 何んとしゆつとでも

りふてえい イヤ豆豆歎めががやうあゆすほどでふらふらハあひげふ
女中づき足そんド舛するふれの脇ハま川平お見下さる外う イヤ歎
ぬくを丈を踏ち免どもと胸りきりかのと代りふコリヤく免どもア
底ふ柿ちとくーあげんとすうともばくとくよきよど とくまいて
やんせ じふぞおはうあうけんせとか イヤくあうぬ とよきよくう
あいつふよを 敗歎めかくらんふんとやうやせいナウ 塙史の本
ぬふかれどもを丈がらはうやに傷て。よハハ子箋とこゑに整
とあひハアモダムゾド珠 リヤは作を代りふんでもおれがふ
るやあであるナ ほきのとく邊背ハ仕りませぬ 画角へあれ



今日うち百姓の放々こするのじやけほどねへくす勧め歎がきられ
故はどかさずす無ぞかへてくれスリヤ承てに勧歎のうは傳授
仕れでふり跡跡あやつとおへて下さんせのナア裏り跡跡ても
跡跡おれ根根邊邊もつひに勧歎をすにむ跡跡る美ハラシねどもつお
の跡跡とハテニ歎つことドヤ。コリヤくけふどもオどもに付く勧歎
の傳授とはおふハアハアとおのなしがせん假ハシマシひもくことをとねき
大をしゆそくせきくまうてそめくをもうちくをやうにつぶてのまをくを美
うちそくあづな井又新衣新衣やう上下にてよたて來來。志志の内内とのまう殿殿
ぬき足足ハよーふかれづよハハへゆをきでんさサトトか不カい
名名もやうげられば踊踊りくまで居居らゆ大切のほ嬌禮嬌禮が調調

ませねばぬ承督相續のさぬけふお本跡跡かアテモぬまく
をやよろとゆあのお清清きるくムろうすす。たゞお付付ふあ連連
法法見見や。さばば下下の復復ゲ立立年年ぬ。厄厄作作もあい幼幼が忠忠を
もす付付ふあふてハ食食ううまくぬぬ。是是ハく体体作作の法
筋筋に於於てが礼千万万まわわ仰仰車車ドド是是さ体体作作の是是ハ高高
と大き大きか二二。何何やびゆくうするこことにひくうをもどろきス。是是が
あきてあく。是是何何やびゆくうするここにひくうをもどろきス。是是が
はあうの道筋筋けけでせ役役でハあい丈丈に厅肌肌と税税下下部部どもと同
ト禁禁歎歎狀狀ヨリヤゆのままでぐるる。イヤせれハナと大き大きにへりよ
外外もあま許許らあありいと被被されあど小。イ是是ハナと大き大きき

さてモニこれがひやさかみあはひとやかく行
けぬをばのどハねつう花街くちもおもねハ又何ぞほふよのおた
のよをまことへて是くをまきあつてふ物そを云ふあるかタれ
どもなづる花街くち來やしゆんせぬに候てお花街くあるハごせ
んくは意見のあ毎度くまはかんげんとてもは安入あきゆ支ス
ぬあひやとらゆはさんとすホてやはり候アリに花魁カイやシが候
くらゆ春せせや花街くちまで付らむたるいはん小來ちうらやシ示
けハ花搖さわぎのう場ばへ出で舞まいこのトヤふ又こと意見いせんにまくタ「イヤ
あれまで毎度くまは候アリ」トハ恐おれあがギ大お前ののまミ今日

ハまごくべり放ゆす上じ伏ふの御入いハ初はじめ娘むすめ君きみとゆ嬪ひめ君きみ延のぶの
はまそく小極きくりマれハ今日ひは是ぜ非ひともぬくはんだん一方かたでムク伸のゆ
と伏ふの安あへといふ是ぜ非ひ今日ひは清きよやホくホ今日ひは是ぜ非ひ宿しゆ館かんをく
てハ天あとおぼはもいくハ伊いぶんは宿しゆ館かんあふれませうハいう程ほど
云いても館かんへ呼よらぬよひやハサアそことひとぞますうおかられせひひト
今日ひへハそくどなやつ財ざいが判はんをかまとお付つけふするごとことをねふ
にゆてあるヌマとおきびん坐ませうマきむ、是ぜきあげなど
のおれゆに候アリ、お見みゆよるゆへ無用むようにまうすれとやくこのド
や。ちやうとおきびとハテねねまづくはきげんを坐ませうトうび

本
わりひき
毛般なそのねふ抜立びとモテ懐想してよき志やんせハナア
入念て毛毛般なそのねふ抜立びとモテ懐想してよき志やんせハナア
スルがんせんぶひまづくとあざる敷物春
ぬうへた仲もかいへ捨うけ又ヌ郎に於てハラタマは速云乍
さぬニテクンダニ立もるとひより確彼のち用於ハモイ母どふハテ根
古前ゆ心ハ根知て活てサアちやつとほそぐんてれこうと一ヶ日小
ハテ根は心ハ根ぞえドて居外るひ又ヌ郎ハ角もそんじても
るゆく速云いやさぬどテベ又ヌ郎どのほうだの好きよしが奴
をもうぞひ下さき候ふ萬ふふはぞんぞれども假令ゆふ付小合計と
ても一命をおもむけあげてハラタマせぬとまをねサミ出でム

本
ウサマギくとまを部さうとも着ひ少似合ぬ遙れの太臣日ごろ人を
罪に犯てち慢被をする荒牧伴従まゆ手討と定て牛房ヤドを庵
と振てにむくふ美殿ハ一命を捨てても速云せ小やむうぬとりハさ
もぐハ叔真どのみ息ありをもくも魂と見ぬにて今と化させ
ぬ大車れとすれどもちう傍に申キふもふされぬまよどがこの
火をしもとひゆひ筋のぬあぶハ美寳のとまをふそれどもかどりハサ
柱者ガ宣示志げぬどもがくやさいでハジモヒ又ヌ郎ゲ海ぬハテ
夫公のぬ祖父叔真どに万端うせ活ス處て居あぐみのうへ
唐云もや一さば供と確りこもふ人でかとサアみされへせぬいがやさ

ねべ湯ぬけ切乃訣と云てりバは家のね恥辱いきねば拂あがむ
美がうぬを一生はゆへに外ハおほまふと六思へを是罪に及ばざ
げぬどの何を隠さフアノ大を一どんへあ歎のねぬふ肉身がれ
一妹君でらるきよやさんととびのやせあよー老歎のぬ湯どのに漏ケト
亂でふうよーアムキヌと老歎ハ又ぶそちな紙でふきナ^ス
きへひも三孫人物怪の幸となりふれ松志が劫あ吏て強盗の内小
と安やしこ大歎のか亂の太を一どんの小猿ひ若異の勧めもき
られぬと老歎は不速出あへヤにてよりのけ没樂法放詩の位名
と喧れあきまもげん在の疎君小熱つとめをさせぬふとあー老歎行

ち太歎久へのぬ孝行がやめたきうちがどのれ不ぬ体^{スル}や^テ
もく入^ス入^カすく達^カて^カよてぬみ討に汝^ヒと^シハ^シ訣^ウハ^ハテおどろ
きへも^スあとの^ス湯放^カら^スハ^スま^ハ大歎^のう孝行^でり^カ お^カう^ス
倅^子だ余^人はう^くべつ親^親負^フモ^サヤされぬ^ク患^キナ^フ一人^突二
人^突ツイ家中^一た^い小^人て^ハぬ^スの^ハ心^事で^る辱^モで^るこ^ト お^前の^ス
か^ハぬ^ス破^キの患^キを下^すてあ^ハせつてふ^ル ナア空^スも金^ス
き^スの^ス下^すやにあて自^ト一^く歎^久の^ス情^スに居^テも是^ハほども乞^ハ
き^スや^ス小^心に^ス疑^フて^カき^ムも^カへ^スお^もそ^うと^き お^アと^れハ^カう
い^スの^ス小^心に^ス疑^フて^カき^ムも^カへ^スお^もそ^うと^き お^アと^れハ^カう

と身清でもかされば中へゆやきへらえりをまくらんハかいとおぼへ先
せ。ほんでもさう跡ろぐさまうされば先ほり差無て後うけのお候とテ
根^{タネ}それにぬくはあれを仰をもとと全浪づく在^リ。金子の手^ハいをと
でも處空へや付て、まうとハあく舞空へや付るほどされば今日をりや
うにべんくとしてありねた右乃役ゆ審にまこと御文トや小信て御
つぐあぬゆの心配^{心配}。役母どむなそ社者ともいまと御や候ゆされ
ば心^心かほせぬ全浪^{全浪}。社者ハれ役かり人のゆきり^{ゆきり}とさん^{さん}せん
さん^{さん}へお力さくふもうちぬのハモそづくじや已^ハとかけびのめひへ
え大^{おお}きのあくとまえ^{まえ}。ホウ又まことふみり跡ろう^跡。ちやめ女シテう
まくら^{まくら}やあすけいできこう。

の考ハ^ハイヤ松^{マツ}ハ大^おもしげ貌方^{めいが}でムリ跡^跡。ムラサキ用^{ヨウ}ミモ
エ^ル。ハイ大^おも^一と儀に財清^{ざいせい}の事あるを來ま^ス。義^{ヨシ}シテ
てつれて跡^跡うとぞんじよ^よて^ス。ハテ根^{タネ}史^シ跡^跡外^ハ財清^{ざいせい}
叶^ハぬぞと云安せて楊^{ヤウ}清^{きよ}ふ^トそ立^ス。あひ^{アヒ}。やなれでハムリ外^ハ
今日と楊^{ヤウ}代^代ハ分^ハ総^{そう}雜^{ぞう}用^{ヨウ}の^ハ笑^ハ用^{ヨウ}。され^ハト^ハ下^トま^セ
ねバ^ハ金^{カネ}引^ひ吏^吏の^ハ金^{カネ}ハ^ハ來^ス。もとぞんじ跡^跡。外^ハ才^才モ^トト
け^ハこのでムリ跡^跡。^ス。行^ハと^ハ麻^マす草^草とコリヤ准^准どと榮^榮。上^上根^根
を部^部。又^ハ千^千或^ハ二^二百^百兩^リ。全^ハ仰^ハ時^ハ。下^ト生^ハ。元^ハ
ち大^大名^モ。さく^ハハ^ハ給^ハませぬ^ハ。私^ハの高^高美^ミハ^ハおまうひ^ハと

せねばあつちを賣ふはゆれませぬ
不全今^の金にハ余まへ
トやい川越本經は右支セと奈キセ引立^トするト^モ外^モ外^モ
左支にモ^トき^テと^モ付にするぞ
ベ^ヘリヤみ外毛非^ゼうち^ヒ身支
とあさる^モやい^ヤさあす^モよばは今^ミ貰代金^ナ五百支^ナ今^日と
乃^ア揚代雜用^ナ七百支^ナ約合^ナ二^カ兩^ナサア支れ^モ一^モサア
その金ハ^ト行^モ金^モと^モくあけ^タ春^モコリヤ又^スス郎^モせ金子^モ渡^シぬ^ス
ふ波^モせやい^ヘテモ^モ金^モみ^ガい^リ程^モも破^ルホグ全^モほど金^モ
そ^モハ^セひやい^ス金子^ハと^ニ氣^モと^モひ^ムあげ^シと^モ一^寸ぬ^シと^モか^シと^モ
社者^ハ社^モハ^ラ安^モの^モり^モと^モも大名^モ世事^モな^シ御^モき^ム

一馬^ト車^キ父^のの^モ心^きひ^ムう^モト^モや^うベ^ヘ仰^ト由^レ貸^モあ^シれて下^マ
ね^ス社^モ者^に在^ハり^トね^ども來^シ於^ハ住^リ身^の上^モれ^バア^イヤ金子
せ^ハら^シね^ベト^モ何^トス^ル取^シ取^シと^モ社^モ者^ハ下^モ取^シと^モ委^シ細^ハせん
そ^モを^シゆ^シの^モ延^シ引^シ小^モ及^シぶ^シど^モ資^シ礼^モ妨^ギと^モの^モ由^レ家^の暮^リ
ウ^ツす^モ嫁^モ一^トも^トや^ク内^モ更^トな^シぞ^モも^トぞ^モん^トの^モ浪^人入^シ社^モ金^モ
モ^モの^モ女^モ下^モ人^モと^モ侮^リそ^モ今^モめ^ト仰^シを^シた^シま^セぬ^モ美^モハ
は^シ親^父ろ^ヒ奥^ガ内^モバ^シあ^シや^二手^モあ^シハ暫^時に^モ詫^ヒ仰^シと^モ
や^ハま^スの^モ自^由で^モ金子^モ備^用と^モ院^文に^モ取^シき^シす^モて^トう^モ
バ^シ場^モが^モ済^キる^モ計^リで^モい^う且^ハ敵^モの^モ志^モで^モれ^バ承^認仕^フモ^ト

グレヤ歌でね歸候やがバアノヤ歌さつゝやれて下さる、ハイモ例を仕る
ちがうぎでみれば、^又速の由承知に近けあいくコリヤく松方亭主^ト
ヘ兼^トかまちにヤ付西^トと院文^ハをう被り持^ト奈いことて若キ老矣
ヘリヤどか^トで公^ト御^ト、^又後^トかちこれに廣石^ト渡^ト轍^ト負^トのあ息^トづ
とのよき^トアスリヤあかこの内判^ト、^又財^トう^ト歌^トれ^トはどふ^トか入
相^ト渕^トをれ^トり^トせ、^又乞^トは^ト贈^トみ^トで^トみ^トり^ト外^ト、^又き^トも^トあれ^トば^ト、^又澄夕^トに^トと^ト院
を^トすと、^又然^トら^トば^ト、^又黄^ト房^トか^ト、^又念^トね^トる院文^ト文云^ト、^又傳^トで^トは^トせ^トナ
う。一^トれのう^ト一^トけ度^ト被^トか^ト入^ト用^ト、^又欵^トつき金^ト二^ト手^ト借^ト用^ト、^又お^トつ

正^トく万^ト一^ト金^ト予^ト返^ト矣^トに及^トば^トひ^ト表^ト等^トを^ト粗^トが^ト傳^トり^ト候^ト矣^ト
奥^ト木^ト室^トを^ト次^ト方^トを^トあ^ト、^又お^ト後^ト一^トヤベ^トく^トは^ト日^トと^トり^ト仍^ト而^ト併^トな^トご^ト
一^ト早^ト竟^トけ^ト一^トれ^トが^ト表^ト立^トひ^トふ^ト成^トて^トハ^トあ^トみ^ト犯^ト辱^トナ^ト防^ト犯^ト笑^トま^ト調^ト
ハ十^ト萬^トあ^ト内^ト化^ト私^ト科^トの^ト内^トで^トお^ト速^トお^ト返^ト渕^トあ^トま^トる^トの^ト一^ト成^トが^ト
然^トら^トバ^トと^ト名^ト別^トを^ト坐^トて^ト又^トふ^トし^ト候^ト、^又是^トで^ト十^ト九^トハ^ト五^トま^トれ^ト、^又仰^トの^トお^トま^トる^トに^トは^ト
う^トを^ト公^トう^ト絆^ト、^又龍^ト文^トで^ト二^ト手^ト内^ト引^ト齒^ト、^又齒^トを^トも^ト否^ト、^又未^ト可^トい^トれ^トち
これ^トが^トあ^ト之^ト李^ト龍^ト文^トと^トは^ト又^ト、^又以^トシ^ト更^トを^ト、^又ま^トあ^トト^トわ^トか
お^ト胸^トや^トま^トする^ト、^又一^ト志^トづ^ト又^ト、^又も^トひ^トで^ト、^又作^トの^トせ^トう志^ト川^ト義^ト
と^ト相^ト候^トの^トえ^トち^トま^トど^ト、^又胸^ト首^ト尾^トさ^トそ^トの^ト体^トく^ト公^トり^ト外^トる^ト、^又春^ト、^又び





しらくお城後お詠林ちよハ皆晴れの美と春又モ生と云
ういやれアテアくま縁ハ象より香込居ニキナと用ひゼストア
のふハまづくお入ア下カシキヰ木ヒと木本とまきを支シ立チ大ト去
モリアとすこか一三人ハもキアマアキ凡アされと人の間アゆく季エやひア
モアのこうト合ハさニある
けかいアミア太アレア勇嚴アは殊ア君クニとハ條アに穴アて泊アりアここレ
とたカひの肉アおそのおそでアくアとアりアモアそアの
むアはすきアト女アかアらアとアつアてア
とアやアんせぬアナアまアナア見アにも放アひア五ア分ア候アぞアまアれ
うアれとアて屋ア西ア行アうアをア構アてア異アかアれとア候アてア姫ア一アや
とアかアえアどアダアモアアアるアかア益アでアうアまアほアナアホシニア橋アよア

かアくアえといア人アがアりアであアうアすア稀アもア小ア足アとア人アとアモアモア
お強ア一アされアけア六ア數ア多ア西ア男ア志アいア久アまアいア波ア急アへアとアてア龍ア
見アふアれアかアれアこアのアあアうアすアかア物アのアそアんアあアラアドアやアムアんアせアぬア今ア日アハアイアエ
くアらアめアくア一アされアはアはアひアにアかア金ア中ア糸アかアてア赤ア魯ア内ア約ア表アを
んアもア行ア公アのア筋アなアのア背ア礼ア緒アはアぬア赤ア中アのア縫ア組アもアはアをア魚アご
おアづアとア邊アにア遠アにア縫アてア緋ア山アのア花アでア豊アすアかアアアそアそア人ア
物アドアやアがアおアまアもア云ア等アけアのア又ア節アなアとア秋アのアさアびアきアとア緋ア
やア波アでア豊アすアかアきアハアチア也アかアヘアとアりアひアつアこアとア来アてアやアアアらアかアとアハア志ア
けアぬアまアかアきアハアチア也アかアヘアとアりアひアつアこアとア来アてアやアアアらアかアとアハア志ア

も内移娘被て山月お笈ぞんと持る とけうちけせいたえ からひて
まくらをくといそくひ入ゆびてお種へどおが悪ひあり持る イエども
もそのときおしなり
忍ふたりませぬ テモヨリみくと作しやにて あぢひお財ふうあき
て まもかとい としげぬ景 あきはす けのまへはくで 納キ ハサタ
毛いはまへアノ先ハラマレく 余り元々に 携り候キ と 布梅の屋と
毛遠へく 當るグと さゆびセホウ法花をやう そゆ云ふさるい と 番川
あれく と かくで びまく あこれやまへぞく アモレキ まくとハテ
寝ひきまくふ で ひりキる さやうで うやう 月夜 と ぞんとてあ
ほうぐひめうづ おまへくと やと おひらう と おもとそのふつ そんま

アシトキをなぐ サア可 老くとナ サタ余ク可 老うと て
ナアハテと グひに云名号のほお被食をう、ナ他不可 老ひグ あされ
もとんあいをどやうぬきをめんぬり可 老くと うんぬくちや
つと退をふてとサ云てお私が小居てハ乐ひに可老と 帰りが
ぬ おね庵 小たぶぬ 欽ふそおりをも氣ひ利ぬナゼ観音
でも氣が無くぬ おなと てモ尼ヒハ お織人女のう せにや
成ませぬモハナ お被食へからにこじが氣つてよちこいナ そまハ
いふ宿苦勞をして おもに おも苦勞するハ おもをどナおもを
おものとけをとうけく 仰ふもき夏ハ おもほどにナ あひ そく おま

ナ幼子も合意の行ぬ事ハ無いは始々トヤシ像にてナ五情に居てハ勿
体あれはうとほ次ハ立木の角も見てはまふサおもやとおもひをそ
レを大々ま
あくどき一見物へやんせら、まか神事とやうで。イヤまよ、喰ぬ志川屋
又ともすとんた
ア先くお娘女コリヤマど、おされ妹おやぢ又そんあと
室もんもうくそす今ハ幼子せしお木おぎをちひ初はじも因果いんご
花樹はなへは伏ふくす流ながれ友とも人ひとを思おもひるが隙ひずきくどくても於村おむら
もはれあれほど経ひき詠よみ詩し堵ふさる品しなひをもあんととあふてもけりとハ
とんとこや一やんせぬゆとふうかすと東ひがしとひのとけを思おもびがに
役わざもがくとけぬみこれ見みて下さえせとふと見みふとにがているのに

余り羽衣はい小人こじん毛けのナな破はれれ角つの乃の春はるの娘むすめ一いけままと
と見えみどふも返へん車くるまのあらぬと云いハ敷ひらききも食く方かたええお主お主内うちを
補ほく色いろダダたたととハオお一い不ふ忠ちゆうありあり審しん男おとこに衣きのふふか神じんどど
毛けうでふんふんをどど審しん男おとこに衣き計けいトトやうりませぬまアア然然も私わとと安やす廣ひろ
也よ敷ひられと枕まくらううととああいいははおおいいナナききれれババササモモ次つぎハハ今いま更またとと々とと
へそそんそうう寝ね男おとこににやや夜よせんせん程ほどににどど拂はアアハハテテたとひひききううででああう
連つづくくのの嫁よめ君きみととああききばば泰たいるるハハ清きよ主ぬしれにに遠とおひひくく下しぬぬままんんああう
主まとと泰たい東とうどどにに海かいササどどぶせせまませせとと仰あふふももおおききをを高たかきき用もち

作付らを下さる事多^{タチ}、を裏手用と云付う志川奥アシカへぞ
やハツ^{タツ}と底^{トトコ}入^{スル}也^{タツ}ハテゆるにあく來て自ふおつと抱付や^{ハマイ}今
そあくハ旅來自^トもよあんたのふ^ト左^シれでひり辞る^{タキ}もまわ云付
や左^シハ抱付やいのふ^トめ門^{モジ}其^シ事^トが庄主^{シヤウジ}れひに來て
抱付やいと作^{ハシ}るハ^モアああこマアおざくか^タそんす西^シ主^{シム}どここにひり
井^モので^ススリヤ主^シの詞^シを背^シき^ムあう^モサア。背^シき^ム役^リませぬ^クれ
ども^{本^ホ主^シ}貰^フうぬ^シ情^シあ^ハば^シ変^ル來^テ抱付やいのふ^トも^ハと^シて滅^シお^スる^ハ云^シ
乃^ハ女^シ房^ヲの^トま^ス志^イハ^キを^アも^ーく^シら^フ合^ハナ^ススリヤ奴^シう^シを^モに女^シ房^ヲ
お^ヒ海^シと^シ云^フる^ハ史^シを^シあらぬナ^タサ^サその海^シを^シハ^ドも^アと^シぬ^トい

やれば大勢^{おおせ}乃^ハ家^け來^リに云付痛^{いた}みあはれ小^{ちい}。旗^きを揚^{あげ}や纏^{まとい}を^シき
て抱^{いだ}て麻^まやう^うづ^づやう^う習^ひひ子^こに云^いそ^そあせ^{あせ}り^りぬ^ぬト^トや^ハた^たド
尋^ね常^{じょう}に抱付^{いだ}やう^うサ^サ。史^シハサアサアサア^{サア}は^はこ^こき^きて
ム^モモ^モテモラ^ラすめ^めと^シ服^ひ身^みじやナ^アサ^サを^シや^ハば^シ來^テ抱^{いだ}
かんせ^ハナ^ア必^ハじ^ハ抱付^{いだ}か^シつ^シて^シ安^あむ^ムよ^うら^うま^せぬ^ぬぞ^シ安^あ寧^ね
氣^きが^ねして主^シの詞^シを^シ背^シくのう^シサ^サそれ^ハゆ^ゆして^シ是^シかんせ^ハナ^ア逃^ハ
ゆ^ハす^ハイ^ヤの是^シ。主^シ外^ハ老^シ者^者が^ハ檜柄^ひみ^ミ真^ま幕^{まく}じ^じや^ナ。此^シ主^シ
でも人^ハ大^ト車^の歎^ハの^トを^シて^シど^ハか^シれ^キと^シぬ^ハと^シあるも
の我^ハ自^シ抱^{いだ}て^シ麻^まよ^うと^シま^まと^シて^シア^シう^シを^シふ^ハナ^シれ^ハあ^ハく^ハき

おどろくお主の情に垂れ下りあんせんナサはゆきあされま
せとづくまとをひかと大もとより用ひにぬり切られていかとハイ
すとえも一月ほどして主の用ひにぬり切られていかとハイ
アタちよこやまととふとおまへお私とおまへ主を放しや放
きぬと趣くぞお主にすらぞやがなまでもそんお主程はさせま
んアイ陳云するハ森木の役アイ陳云ハ汗乃如じてムリキ
ハヨウかして見せる墨ノトヅミとモトリモ支方^去アレ因が舞ふ
とぐはやくとと目がけてヤア因が舞ふとこれアヤフリやうぞ^き
あけるとモテスヘ物りてアヤ因が舞ふとこれアヤフリやうぞ^き
舞ふりアシセテ舞ふとぬるあくまうくとてよどるの酒と波乃舞ひ人水と
とれんくはにかくみてはくの安^安と見る安方にはみぢ
くとくすくおうきがゆざるすも^おモチ申中^申れりのあきらめ^きとさ
にえほりおきかねどしぐみきろぐく

モフキドヤ^モソノモソノモ^モ圓^モクハ^モ歌^モさん^モのよ^モ水
ハ^モア^モ人^モ後^モあ^モと^モ本^モ上^モア^モ是^モヤ^モあ^モけ^モと^モ大^モも^モう
歌^モつも^モお^モう^モの^モこ^モう^モあ^モう^モ安^モに^モ仰^モて^モハ^モサ^モ私^モナ^モア
と^モお^モく^モす^モ又^モハ^モ辺^モに^モ人^モお^モ一^モう^モの^モひ^モイ^モち^モく^モと^モお^モう^モ
部^モ入^モみ^モア^モ笑^モ山^モ又^モ部^モゆ^モと^モお^モも^モお^モう^モと^モお^モう^モ
湯^モお^モ終^モし^モやん^モた^モハ^モア^モ私^モや^モか^モの^モお^モ不^モ仰^モや^モエ^モ仰^モと^モ
大^モ私^モや^モ歎^モの^モ所^モや^モ歎^モ歎^モの^モあ^モ味^モあ^モお^モお^モの^モお^モト^モ
や^モお^モア^モサ^モ主^モと^モハ^モナ^モり^モお^モき^モア^モこの^モ空^モ不^モ立^モ
お^モと^モ捕^モア^モサ^モお^モ被^モア^モ面^モ三^モ根^モ木^モうち^モご^モと^モお^モと^モ

家來ごとく大ゆきハテモ云々ハナミノ威光で私を身に入れて貰せう
又そよめ誰ととえ一ヌヌ郎をも大いに教んまへナアと又ヌ郎とつきこゝにござ
又ヌ郎をも泊り入らるゝおもむねてそひふとちを告
又ヌ郎をコリヤ何とあされ外へそゆあされ来るとハセヨロゴイシギン
あらぬ挨拶をねて心の丈を出ておけ状マアソト ほり付くハイいや
うん毛主西け財にあつまつむとくらうアキモチハ生娘きがすわドナ見サセの
おおぢりくぬゑゆいあゝそれ程不こゝれうノサふれよみゆをおへてを
じやうと又引とアレタヌシイくこゝをもちとハあのマア一寸ちよつとと
くかそぞやうすかそぞアイタミアリタミともあられもふおやナアといひくヤアアリ
又みのうをバキトモ 紅カミづのくつれやいとひくア味いく西平瓶カボトガナラニ等
カボト

ふ作法さくわをそなにや殊楚ハラにて身に云れてなまろおうへ能
てうげれに髪カミとそあるひあつことばをうく又櫛鑿びん乃ほつとハ枕カシマのと
ぎとうとうとひく補ツカるツカよの度その度もまゆまゆうちや川カワとう海シマあさと
モ色いろとばうけりのふをききおもぬ私わたくしの方かたよやんせねどどうゆいナ
先まへおならびのまぶれままそサ内うち療り人じんをもくらひまされませませませま
人ひとをせ理りを体たいふりととハテ极きわちや山やまとくはれはれまませせそんあ
お先まへおれおれをあへナなと着きままく待まて居ゐれるままとおふかおらおらせうれ
ス席せきうらうらと見えあおもくあかあれれでひり神かみるるああくくススまま、枕まくらここの
つかひ中なかでナシま枕まくらをものうシテゆゆあされ来くると

若別がきものふれと森のやゑへさんすむぞりりやめと云
やんもへ云里はうを枕とすぬ女度丁女とせ出合でまつあいトやまニ丁
蹴けりけとくのをせてきのよやゑそと二度にじどへすけえへやんにやうへお
つやもんどそこあトやモラくさうまふう餘よふのをあで。がいきくとおる
紫し木き楊ゆくふやか被ひめにま殺さつとままれ下さの裏さわらいを併あわせやまへとお
とのばその二あれや云心こころトやに傾かたむけやななヶ効こう歎かん歎かんもまれとも無むりトやなふ
想おも念ねん願ねがさへやんへてもまご率すこ々せぬすこおのうや情氣じょうきまことにかきりん
奴やつの必ひをくひ務むえにも情氣じょうきををきてあるあるとたは藏くらの津つるふきの
とおのとやれぬ男おとこにハ七八やくととうごくやふやふやが神かみを引捕ひきて

あぶやまごく院おとこ小ちいいの後のふととふへおのれおのれががこのどどやへサイナ
アミアミお裡そで友ともと誰だれよと恩おんはあやんもへ知しれとゆ女めふふトト然ぜんと向むかう
齒くち乃の絃げん目めとあうあうぬ娘むすめよよササタタ三み嫁よ入いままの大おももの内うちの娘よを
捕つかへ無む併あわきき状じょうアア、お裡そで友ともお被ひ身みひおげぬれの云い号ごうじじややままと己おのに
賀がふふ然ぜんと無む窮きゆうの劍けん真まと内うちに居ゐるおれおれやよよへき内うち
の世よ活はにがて居ゐあうあうそのあある息きの嫁よを捕つかへて裏うら外ほかとてのままく
不ふ化か法ほうかといいここううそこそかかハハとおひ入いそそて支さがマア深ふか井い又またうれの
物もの須すのう身み哉めでふりキキうほんふ三みつ子この癖くせが有あることことも初はじ
以い時ときうりんをくらの毫ひ端はにゆきせす違たが離はなととてへふととこののおと



おとりは法度の拂直ゆづめくとやうあらとやらほんにくふすら拂ふす
ら教けいも限かぎもあらうに人の勘かきせうて考えんへ麻わらだへ仕あつて記き
と考えんへまにし金きん狼ろうをうばひれ斗たたかりう立たつうとの女め中なかとぞうへ金きん
仲なかのれんばやんふ云いふもいきれるるうへナアモ恩おん黨とうと若わやんわが大お
ておされと又左さらななも行おこハ母おやも獨ひとりササみとヨヨグ行ゆき八百中ちゆく母おや
の行おこと刀とも行おこれ檻せうえんもよも余よつこう劫えん齒うもあらこあると劍けん
貞じん狂きょう引ひきれて活は世せ活はかきもむうものめをヨリやいヌヌでも人ひとねねよ
ふらふら狂きょうの正まさ宗しやくの暴ばく一いっざざぞ劫えん齒うもああされれれととらひひそそ
せせ見み云いううの女め脣くちにいつともああそそでと差さて走はしりやんやんをねね雲くもいい

匂におの嚴きびし云い村むらトトによよううて松まつ一いやああくくの効こう齒うのゆうゆうととへいいいききどど
祝めいハアイあい晏えんんとととここ一いまま大おきき又またハハて深ふかくくうれれくくどど
ミミののここ刃と背せおおふふてて女め唇くちととハハととぬぬれれとと犯まつににななが素すうう川かわ
の今いまののここ見みとと思おもへほほんんに済すくいいととぼぼれれて深ふかくくななどど遙と遠とそそ
謂いうう怨おやんやんふふききくく詫あすすああどども刺されれののまま母おどどの悔くやががふふせせるるでできき
ををややくく奴やよよ人ひとををすすととくく云い來きもも空そら不ふ母おののは後あと高たかききの源げん
主しゆべべままくく種たね惡あいい奴やととりりああがが悔くやめめせせううももかかりりノノイイヤヤそそ馬ま
主しゆゆゆドド也や御ごそそアアイイエエくく今いまののみみ云いて下さんんををほほどど是これ種たねででもも私わがが
ゆゆととろろてて下さんんををれれくくばば外ほかででええるるししうう怒おいいおおととナナぞぞししやや

人一とサア。そまや今と母じやが妻付ぬかにせふを放トやヨヒノかん
萬まゆりよだれく外の女子とへ目と目をつゝ食一もせぬかねよヘノウ
アリヤやんまのひでらんをく物の靈とひふぢやいそんやう經と鑑
でやかん等に然已のふへモ触りよてトさんと嫁一うんをハシグよ
か老でも云是のまどやと思ふて異バニモ真象の今之見れハ只なら
ぬ詫うへ是とぞやこれゆぢやハテ候グ劫焉のゆりること
解て辛地と疾苦も即体は禪活と稱すてり女房へのれと憐め
に云毛のドヤ くらうと すき やんせんナタとみたのけちス
号の女房ふまへ嘆うき立ダまにありぬよみにね草 もがとむくいと
のいドヤとみる

浦と侍をれあまむニ師キジヤ とびきりをのうり そり
浦と侍をれあまむニ師キジヤ とびきりをのうり そり
これぐおまはひそり矣詰 まされ外とくホウこれひまと女族由矣
詰私へお禮教と氣り未て今津けをどとえでり内うそをへふつと
く そと聞かひへど すとをなれでらり外ぶざへざのわふ 云實せても
ぬ又みよひへサイナア今モキムモヘ丈丹右夷のと報負などのふ
和モ久経サダ舟又ラドセ古世活ふかさきゆ 駕貞久へ美程也
夜のう世活丈丹右夷のとれづ縁に引くも実の謀回り
乃モ時 あき キルモ道ハ筋あ母友のう効商あんゆう氣強いかさ
れなど亞細ハ今を懸んで居ましと狀ともその見えアむでも

とおひへおもな假令まねいど二で又み節にあましやん志やうとも必び。サ
。祠アリをつるとかさきかハイそりやたまゆ御内マハシれ云付マハシ合マハシ
歎マハシて居マハシすけども入マハシのれあ云体マハシあサタマハシどのれかと仕マハシ
さそふやう知マハシせんほど必ずかまへもつみい振マハシの櫻マハシりよ行マハシり
ぬやんマハシれれば明日マハシ又み節のマハシ事マハシとやう云マハシでムキトス
やんマハシのうでムキトスマハシイエ往マハシふも入りマハシ外マハシぬマハシスリヤサマハシハ
泣マハシか心マハシもとそを又マハシふマハシくマハシれ方マハシスマハシ入マハシてマハシゆ
ちマハシとマハシ心マハシもとそを又マハシふマハシくマハシれ方マハシスマハシ入マハシてマハシゆ
正マハシすサマハシ往マハシ來マハシ遊マハシ中マハシでまへ今マハシのあマハシサマハシタ今マハシあマハシへやつ

てもクニナア古エビシ勅エビシ當エビシゆのまると物エビシもなか必エビシば。婦エビシとおこととおふかと
又エビシの房エビシ河エビシんにマテけかかよエビシで遠エビシ出エビシてふんモサタエビシ一不エビシに下エビシ向エビシ
りマテ殊エビシう豆エビシのナエビシ私エビシ也エビシ豆エビシとエビシとエビシへ假エビシ令エビシ私エビシも入エビシてエビシ
ねエビシこそ余エビシ代エビシ人エビシがエビシ狀エビシ捨エビシてミエビシや小エビシくエビシ主エビシ財エビシの科エビシハエビシ隨エビシ人エビシ禁エビシへ
今エビシう教エビシとむと改エビシらサタ又み節エビシ心エビシと改エビシまエビシ豆エビシ祭エビシ親エビシをエビシへ
由エビシ教エビシやてうりまエビシとエビシとエビシ本エビシおのエビシのとエビシひきエビシそエビシ立エビシてエビシよエビシりや母エビシトエビシや
せエビシもを教エビシうとエビシひのあエビシ又エビシ豆エビシどエビシの豆エビシふうコレ志エビシ豆エビシとエビシぶれてエビシ
とエビシひつけエビシ豆エビシと又エビシ豆エビシてエビシ豆エビシ立エビシてエビシよエビシりや母エビシトエビシや
豆エビシ教エビシをエビシ去エビシふエビシ去エビシふエビシて遊エビシ豆エビシ云エビシ考エビシのエビシお神エビシと美エビシ此エビシのエビシ豆エビシ大エビシ

左レヨモハハテミツルメトヤノトヨヒ
ヘミホ豆内合トヨシキヤマレツの合内合ト
妻を節ハ裏又ミチ又アリエタガト彼又
返竹首尾又ム大モ一様又ス
袖もすぐ小左斐又万タナタモ若ハ仰又居に任せて縫んせ又ス
あ人ともまど又うの乃奥陰画又ス
ス又うく又うの乃奥陰画又ス

絵本伊賀誠又御食羽大席又早り



初上卷



西村

4397
洋書

